奈良訪問同行記

10 月 4 日（金）

ディクソンさんご夫妻、電通の荻原賢一さんの 3 名は 8 時 47 分品川駅発の新幹線のぞみで 11 時に京都駅に到着。ＰＯＷ研究会の高田ミネ、小宮まゆみは 10 時 48 分京都駅着のひかりで先に京都に到着して合流しました。大阪赤十字病院の看護師田中さんも同じく京都駅で合流し、一行は 5 名となりました。近鉄特急に乗り換えて 30 分ほどで近鉄奈良駅に到着。荷物をジャンボタクシーに積み込み、5 分ほど走ってＪＲ奈良駅直結のホテル日航奈良に到着しました。看護師の田中さんはオーストラリアで 1 年働いた経験があるという、英語に堪能な女性でした。

昼食後に奈良日豪協会の佐々木理事長（男性）、英語に堪能な中谷内さん（女性）、荒木さん（女性）と合流し、ジャンボタクシーで椿井（つばい）小学校に向かいました。椿井小学校は 1872 年創立という古い歴史のある公立小学校で、興福寺や元興寺にも近い奈良町にあります。1988 年奈良市がオーストラリアキャンベラ市と姉妹都市になったのを契機に、キャンベラ市のエインズリー小学校と姉妹校になっています。屋上に上がると、興福寺の五重塔が間近に見えました。

校内を見学した後、集会室のような広い教室で 5 年生の生徒と交流会をおこないました。ディクソンさん夫妻と通訳の中谷内さんが椅子に腰かけ、子どもたちは対面して床に座り、まず英語を交えた子ども代表のあいさつ。続いてディクソンさんへの質問の時間となりました。活発に手が挙がり、先生の指名で次々と「オーストラリアのどこに住んでいますか？」「オーストラリアの独特な食べ物は何ですか？」「伝統的な行事はありますか？」などの質問が続きました。ディクソンさんは嬉しそうに、地図で東海岸に近い Warwic（ウォリック）を示し、伝統食のベジマイト、競馬のメルボルンカップやロデオのことなどを話されました。最後に折り紙付きの寄せ書きをプレゼントにもらい、校歌斉唱を聞かせてもらい、集合写真を撮って交流会を終えました。最後はスターのように子どもたちから握手攻めにあい、ディクソンさんは終始上機嫌でした。

学校を辞去して日豪協会佐々木さんの案内で、奈良公園の浮見堂から飛火野の方へ向かい、鹿が沢山いる所で車を降りて鹿せんべいなどを与えました。ちょっと鹿が集まりすぎて、パンフレットをかじられたり鹿に服を噛まれたりと大変。その後奈良県庁舎の屋上から春日山や三笠山などの景色を見て 4 時半ごろ本日の観光を終了し、日航ホテルに戻りました。

10 月 5 日（土）

前夜雨が降ったが、天候はまずまずの曇り空で、ディクソンさんは疲れも見せずジャンボタクシーで

東大寺へ向かいました。日本青年会議所の全国大会があるらしく、大仏殿前の回廊に囲まれた芝生に一面にパイプ椅子が並んでいて驚きました。ディクソンさんはゆっくりと歩いて大仏殿に入り、写真を撮りながら興味深そうに見学されていました。奥さんのジューンさんは瓦を寄進して、Dixon　Australia Peace for all と毛筆で書かれました。電通の荻原さんが、この瓦がいつか大仏殿に使われますよ、と説明しました。

大仏殿を出ると一同はまたタクシーに乗り、鐘楼の脇を通って若草山ドライブウェイを登って若草山山頂に到着。この頃には天気も晴れて山に囲まれた奈良盆地がよく展望できました。眺めを堪能して車で市街地に戻り、春日ホテルで奈良日豪協会の方々と会食。元会長という男性は、名刺を見ると白毫寺住職の宮崎快尭師でした。カウラにはすでに６回も行っており、カウラ事件で亡くなった日本兵の墓を訪れ、慰霊の読経をしているということでした。

食事後日豪協会の方と別れ、奥さんのジューンさんは東向（ひがしむき）商店街で買い物、ピーターさんは春日ホテルに座って一休みされました。この時間に高田、小宮はピーターさんに捕虜時代のことについて色々質問をすることが出来ました。

ディクソンさんの捕虜体験

ディクソンさんは今回来日された他の元捕虜の方々と異なり、ニューアイルランド島カビエンで捕虜になり、ラバウルから横浜に移送されたという体験をされています。泰緬鉄道で労働させられることもなく、将校（中尉）であったため兵士とは別に鳴門丸で移送され、もんてびでお丸の沈没という悲劇に巻き込まれることもありませんでした。カビエンやラバウルの捕虜のほとんどは、もんてびでお丸とともに海没してしまったため、ラバウルの戦闘や捕虜の様子はあまり分かっていませんので、ディクソンさんの体験談は貴重なものだと思われます。

「私はニューアイルランド島の守備隊の将校だった。日本軍は上陸前にケビアンを爆撃した。なぜかと言うと、そこにはオーストラリア空軍の良い飛行場があったからだ。さんざん爆撃した後日本軍が上陸して来た。私は日本軍が爆撃した砲弾の中から、爆発しないで地面に突き刺さったままの不発弾を掘り出して、それを爆発させ日本軍を攻撃しようとした。私と部下合わせて 4 名がその作業をしていて、その最中に日本軍に捕まった。他の将兵は日本軍が上陸して島を占領した後、島のあちこちに逃げて捕まったが、自分たちはそれより早く戦闘中に捕まった。そこから（ニューブリテン島の）ラバウルに送られ、しばらく収容された後、船で横浜に送られた。ケビアンでは虐殺などは無く、私だけでなく約 160 人（兵士や民間人）がラバウルに送られ、そこで収容された。その後自分たち将校は兵と切り離された。

兵士たちはもんてびでお丸に乗せられたが、それはアメリカの潜水艦に攻撃されて、船は沈み全員が死んだ。あれは悲劇だった。

横浜ではヨットクラブに収容されたが、一緒にいたのは Joe Scanlan, John Mollard, Geoff Lempriere, Ted Best がいた。Geoff Lempriere は家族が日本生まれで、日本人が面会に来たよ。日本の羊毛会社と貿易で取引があったらしく、自分たちとは違う特別待遇を受けていた。Joe Scanlan はラバウルを守備していた部隊の指揮官だった。彼は Colonel（大佐）で、2/22 部隊の隊長だった。 John Mollard は陸軍の軍医だった。 Ted Best はチャンピオンランナー（陸上競技選手）だった。後に善通寺に行った。ランプレア以外はみな善通寺に行った。

自分がヨットクラブにいたのは 3 日間ぐらい。その後大船に連れていかれて尋問を受けた。大船には 2～3 か月いたと思う。その後収容所を何か所か移動して善通寺に行った。善通寺では労働は無かった。自分は将校だったので、兵士のようにＰＯＷとしてではなく拘束者という扱いだった。その後、善通寺から直江津に移動したときはドッグヤード（船渠）で働かされたが、何もせず座っているよりその方が良かった。それから花岡に移動し、最後は仙台から帰国した。

ラバウルで捕えられたオーストラリア人看護婦たちも同じ船で日本に送られた。横浜ヨットクラブでも一緒になった。しかし善通寺に送られたので、その後彼女たちがどうなったかは知らなかった。戦後になってからはケイやホワイティなど看護婦たちに何度も会ったよ。皆元気で前向きに生きていた。ホワイティが年を取ってどんなふうになったか知りたいよ。若い時はものすごく元気で、ワイルドな女性だった。

私は仙台で帰国の船に一歩足をかけた時から、すべて忘れよう、これは戦争だから仕方が無い、と考えることにした。日本への様々な感情はすべて日本に置いてきた。捕虜の中には戦争中の体験を英雄視するように語る人もいるが、自分は戦争を英雄的にとらえることには大反対である。自分の仲間にはそういう考えの人が何人もいる。」

こまでお話を聞いた時に、お買い物から奥さんのジューンさんが戻ってきました。ディクソンさんは、「今尋問を受けているんだよ！」と言って、まわりを大爆笑させました。

その後日豪協会の方々にお別れの挨拶をし、ジャンボタクシーに乗り込んで一同で京都に向かいました。16 時ごろ京都に到着、ディクソンご夫妻を駅の上のホテルグランビアに送り、そこでお別れしました。

（小宮まゆみ）